

日本の文化は、「自然」を先
生として育んできた

日本の文化は、自然観として「自然に対して敬虔になる」とせ

いいんです。山と海はお互いをつなぎ、支え合うものだということ、ヨーロッパにおける道の役割は、日本では川が担っているんです。川は昔からありますよ。例えばローマの道が世界文化遺産になるのなら、大井川がならない理由はない、ということなんです。



日本の生活の基礎には、文化・芸術がある。それは、すべて「自然」からの影響なんです。そしてこの考え方は、グローバルな世界に共感を持って迎えられつつある考え方なんです。

ざるを得ないんです。自然を征服するのではなく、自然に依拠して、自然の声なき声を聞き、一生懸命生きながら、自然を生として我々は技術を改良してきました。自然と人間との調和というのが、最初から入り込んでいるのが日本の文化なんです。自然と対立するのではなく「自然と調和する技術」というのが日本の技術で、したがって、その背景にはそういう科学観という自然観のようなものがあるんです。自然に対して美意識が

ありますから、日本の科学というのは、単に技術というよりも芸術的な装いもある、とさえ思えるわけなんです。

自然に対して謙虚になろう
という気持ちで世界標準に

地球から見れば、月に人間を送ったほどの人類であるのに、台風一つコントロールできない。地球温暖化も進んでしまっている。どうも人間は自然に対して謙虚な気持ちを持たなければならぬ、というような考えが「地球全体」としての考えにまわって来たと思うんです。

森をつくろう、森を保全しようというのが「人類全体」のスローガンになってきたんじゃないかと。

日本では、特に奥大井では、山々の植林、治山事業など一貫して行ってきました。自然はコントロールしきれものではなく、自然に学びながらということなんです。自然を破壊するのも技術ならば、自然を回復するのもまた技術であると。自然に聞きながら、環境に聞きながら、

建物は地産地消で、この木でつくるとか、あるいは県産材でつくろうか、とか。色々考えれば景観としての価値も高まるわけですね。

「山」と「海」をつなぐ「川」
が存在して初めて一体となる

日本の生活の基礎には、文化・芸術がある。それは、すべて自然からの影響なんです。

そしてこの考え方は、グローバルな世界に共感を持って迎えられつつあるということなんです。中国も追いついてきています。すごい勢いで。

日本はその次を目指さないと。これから日本は、もっともっとと地方分権になっていきますよ。

そう言ったときに、「山」と「海」、そしてそれらをつなぐ「川」というもの、これで「一体」なんだと。これが神聖なものであり、それを世界文化遺産にするということ、静岡県こそふさわしいのではないかと。

これは大井川が千年の重みがある、歴史を持つからこそできる

それに調和したものをつくっていかうとする動き。技術の向かう方向が破壊から調和へと変わってきたんですね。我々日本人が、昔から一貫してやってきたことなんです。

そうして考えると、南アルプスが生む大井川。それ自体を文化遺産として世界に示すということ、ますますその使命は大きいといえます。

それだけではなく、やがて日本は道州制を迎えるときがやってきます。

そのとき、静岡は中部圏の中心になりますよ。空港もできる。2009年3月に開港します。

駿河・遠州の中心になるわけです。もともと静岡は、関東圏と関西圏の中間にありますから、その近くに州都を持つてくれればいいんです。経済の中心は名古屋にいくかも知れませんが、静岡は文化の中心地になればいいんです。

そのとき、この地域は州都の奥座敷になれますよ。

そしてここで一服の川根茶をいただく。健康にもいい。水もある。大井川がある、と。

試みです。押しつけるものではなく、「いらっしやい」と迎え入れるものなんです。

やがてこの地域が、世界の千年の都の一つになるんじゃないかと。そういうような夢を持って、千年の学校を続けていってほしいと思いますね。



この地域には人間にとつて一番大事な「水」がある。「清流」があります。清流が清流たるゆえんは、山が急峻である、水がよどんでないことですね。

「景観が持つ可能性」も含めて考えることも必要

これは日本でしよう。大井川ですよ。距離が160キロなら、上流から下流まで往復だつて可能ですよ。ここなら簡単に水の芸術を味わえるわけです。

スイス独特の山小屋というのがある。あれは良く考えられている景観ですよ。

この地域も、屋根の色くらいは同じにしようとか、小学校の

「水の惑星」といつているわけですから、「水は人類の宝である」と、どこかがきつちりと言わないといけない。

それはどこかといったら、こ